

国際社会において、受容・発信する能力の育成：その4

著者	八宮 孝夫, 秋元 佐恵, 須田 智之, 多尾 奈央子, 橋 深美, 山田 忠弘, 田中 真美
雑誌名	筑波大学附属駒場論集
巻	55
ページ	77-100
発行年	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150905

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その4—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

八宮 孝夫・秋元 佐恵・須田 智之
多尾奈央子・高橋 深美・山田 忠弘
田中 真美

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その4—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

八宮 孝夫・秋元 佐恵・須田 智之
多尾奈央子・高橋 深美・山田 忠弘
田中 真美

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第 3 期の 4 年目である。研究開発課題は「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」となっており、その研究の柱の中には「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が位置付けられている。また、ここ数年で本校生徒が日本国内・海外を問わず研修をしたり、英語での研究発表を行ったりする機会が増えてきている。今年度も、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）、他校 SSH プログラムによる海外派遣（アメリカ・台湾）、The Thailand-Japan Student Science Fair 2015（タイ）、東芝 TOMODACHI ACADEMY（日本）等のプログラムが実施されている。この状況を踏まえ、英語科は普段の授業の中でよりいっそうのプレゼン能力向上を意識しつつ、外部からスピーチコーチを招くなどして標記の研究プロジェクトを進行させている。

キーワード：グローバル・サイエンティスト、英語プレゼンテーション能力、受容、発信

1. はじめに

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では中高 6 ヶ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6 年間で基礎期 [中 1・中 2]・実践期 [中 3、高 1]・発展期 [高 2・高 3] という 3 つの段階に分けて位置付け、それぞれの特徴に応じた指導にあたっている。

授業構成は以下のとおりである：

中学 1 年生～中学 3 年生

「英語」4 時間（LL・TT 各 1 時間を含む）

高 1 「コミュニケーション英語 I」3 時間+

「英語表現 I」2 時間（TT1+LL1）

高 2 「コミュニケーション英語 II」4 時間

（TT の 1 時間を含む）

高 3 「コミュニケーション英語 III」3 時間（自由選択）

「英語表現 II」2 時間（自由選択）

高校英語は教育課程の変更に伴って新学習指導要領が施行されているが、本校では従来、英語は英語で教

えることやコミュニケーション活動を重視した教育を行うことを英語科全体の共通認識としている。

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」である。また、SSH 研究開発課題として「グローバル・サイエンティストの育成」が掲げられ、そのための手段として「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が標榜されている。

本稿では、まず本校の国際交流の機会について述べ、次にこの年度内のこれまでの英語科の取り組みを振り返る。なお、英語科として国際交流を支援する取り組みについては、現在進行中のもの、および年度の後半で実施されるものがあるため、一部については昨年度の実施報告を参考資料として挙げることにした。

2. 本校の国際交流

2.1 はじめに

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、海外の高校との研究交流実績を積みあげてきた。2012年度からはさらに、国際社会での活躍を前面に押し出した第3期目の研究開発に入ったところである。また2011年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会が確実に増えてきた。

2015年度の国際交流活動事例(年度内に今後予定されているものも含む)を以下に挙げる。

<SSH 関係>

- a. 台湾台中高級第一中学との相互訪問
- b. 釜山国際高校との相互訪問
- c. 横浜YSF高校SSH事業による米国トーマスジェファーソン高校訪問
- d. 立命館高校SSH事業による台湾共同研究研修

<SSH 以外のもの>

- e. 東芝 TOMODACHI ACADEMY（東京にて日米の生徒が環境・社会問題について英語で討論）
- f. The Thailand-Japan Student Science Fair 2015（タイ教育省による国際交流推進プログラム）
- g. 日本学術振興会によるサイエンス・ダイアログプログラムの活用
- h. イングリッシュ・ルーム

このように多彩な機会を通じて生まれる外国語習得に対しての生徒の気づきを大切にしながら、英語学習にさらに意欲的に取り組んでくれることを願いつつ、日々の授業を展開している。

3. 各学年における取り組み

3.1 中学1年生（69期） 担当：多尾奈央子

3.1.1 はじめに（基礎期のスタート）

小学校での英語教育は外国文化や外国語に対する興味醸成に多少の成果を出しながらも、いまだ様々な問題を抱えており、今年度の指導でもその問題を強く実感しているが、それぞれの学校での取り組みが定着してきたことは窺える。授業初回に今年度入学の69期生にアンケートを行ったところ、多くの者が早くは小学校1年次から何らかの外国語活動を経験してきた、

と報告している。

そのためか、外国人教師との授業での会話やペア活動、さらに発表活動に抵抗感がなく、積極的に自己を外国語で表現する態度が養われてきているようには感じる。

その反面、その場の状況やジェスチャーなど文字を介さずにある程度の活動内容が感覚的に理解できることから、指示を聞き流したり、聞こえた単語からかいつまんで指示を自分なりに解釈するという良くない「癖」が身につけてしまっていることも実感している。外国語（英語）を教科科目として「勉強する」という心構えと姿勢を身に付けさせることが、中1初期での重要な指導項目であると思い、その点を重視して指導計画を練った。

1年間の授業を始めるにあたって生徒には、中1での到達目標として、①英語らしい音声を身につける、②積極的にコミュニケーションを図る人になる、③単語を見て自分で発音できる（辞書活用）、④英語の論理に慣れる、の4点を示した。

3.1.2 授業の概要

3.1.2.1 授業の構成

英語の授業は週4時間あり、そのうち2時間を教科書中心の授業（＝英語の基本的な構造から「型」や論理、および最終的には内容を産出するに必要な語彙を学ぶ時間）、1時間をLLでの授業（＝聴解力を養う時間）、1時間をTT授業（＝他の3時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間）と位置付け、指導を行っている。

いずれの授業でも、小学校外国語活動で身に付けた外国語に対する好意的関心を学習の中で失わないように、生徒にとって身近な語彙や文章の型で繰り返したくさんの発話練習をすることでコミュニケーションに必要な不可欠な「語彙」と「型（語順）」を身につけられるように教材作成に留意している。

3.1.2.2 教材

・2時間の授業

三省堂 *New Crown English Series 1*
mpi 『Active Phonics』
数研出版 『5-STAGE 英文法完成 BOOK1』
自主教材（プリント）

・LL授業

Oxford University Press : *Listen First*

・TT授業

正進社『Talk and Talk』

自主教材（プリント）

その他、NHK 語学番組の『基礎英語 1』聴取の継続を推奨している。

長期休業中は課題として reader 書籍を与え、夏季休業には Oxford University Press の *Let's Go to the Rainforest*、冬季休業には同社の Read and Discover シリーズから *Wheels* を課した。課題に対する評価は、内容に関する小テストと任意の 1 ページの暗唱発表で行っている。いずれも説明文で、中 1 での既習文法項目で大方読解できるレベルである。3 学期にはこれら書籍で学習した説明文の型を活用して各自で設定した題目に従って発表活動をする予定である。

3.1.2.3 教科書中心の授業と TT

4 月～5 月下旬は、フォニックスを利用して綴りと音の関係の確認や慣用句的な英語の表現などを中心に、小学校英語からの円滑な橋渡しを意識した授業を行った。

6 月以降は教科書を基礎に、be 動詞・一般動詞・疑問詞を使った疑問文・命令文・can・because/when などの接続詞・現在進行形を順次取り上げ（過去形は 3 学期）、知識ではなく道具としてこれらの文法事項を活用できるようになることを図っている。

教科書ベースの授業では以下のような授業構成が基本である。

- 1) small talk でウォーミングアップ
- 2) その日に取り上げる文法事項を使った活動
- 3) 教科書本文の確認
- 4) その日の学習事項について「書く（綴り）」活動

TT 授業では、該当する文章の型の状況に遭遇した時に反射的に発話できるよう既習の文法項目を反復練習し、応用して自分自身のことについて述べるスキット作りと発表活動を行っている。人前で発表することに慣れ、聴衆に伝わるような発表能力を積み上げるために、毎回全員が発表できる場を設け、評価の対象としている。その際生徒による相互評価も織り込み、互いに encourage させることからプレゼンの成否は話し手だけでなく、聞き手の姿勢も大事であることを理解させるべく努めている。発表の際の指導ポイントは、Speak slowly, loudly and clearly. および Eye Contact である。その他、posture, gesture や visual aids の効果的な使い方、またはその逆も実践の中で指導している。

3.1.2.4 LL 教室での授業 担当：田中真美

ESL 入門期用の教科書 *Listen First* を本年も使用し、聞いて理解することを中心とした授業を行っている。この教科書では簡潔な英語での指示文と聞き取りの中心となる語彙が英語で表記されるほかはイラストのみが示される。音声は英語の自然な速度や口語表現が入門期学習者用に過度にコントロールされずに用いられている。検定教科書準拠の音声教材と本質的に異なり、現在進行形や助動詞 can、疑問詞を用いた質問などが会話や描写の中で早い時期に出現する。その全てを聞いて意味を理解することは中学 1 年生の生徒に要求するのは適切ではないため、毎回情報を決定する要素に焦点を合わせ、生徒の注意をそこへ向けるよう心がけている。例えば位置関係を扱う Unit 3 では on the / in the / under the の子音やリズムを注意深く聴きわけること、衣類服飾品を扱う Unit 5 では shirt / shorts / shoes 等の聞き分け、単数扱いのアイテムと a pair of を用いるものを判断すること（この課でわざわざ pantyhose も出しているのがこの教科書の油断ならないところ）という具合である。

2 学期中頃から *Listen First* で耳に馴染んだ表現を別の動画付き音声で聞き「英語がわかる」楽しさを経験させるため、1) 字幕がなくても意味がわかる程度に易しく、2) 1 回の授業で繰り返し見ることのできる短さ、という 2 つの理由で *Peppa Pig* を扱った。英語圏の幼児向けシリーズであるが 3 歳児から大人まで楽しめると評価される秀作で、採用の狙いはある程度達成されている (<https://www.youtube.com/peppapig>)。以下は参考までに、ある英語サイトでの *Peppa Pig* シリーズの紹介文である。

It's getting a little old these days (it began in 2004, and hasn't had new episodes since 2012), but Peppa still deserves an honourable mention for the way it pioneered the idea of making TV that was somehow watchable for both tiny kids and adults. While the animation, colour palette and voice acting are shooting straight for the three year-olds in the house, many of the jokes are aimed squarely at grown-ups. (<http://thebests.kotaku.com/the-5-best-tv-shows-for-little-kids-1686163735>)

3.1.3 評価

評価材料の主なものは以下の通りである。

- ①期末考査

②小テスト

③課題（復習のための問題集と自作プリント）

④TTでの発表活動および audience sheet（聴衆として責任を持って級友の発表を評価するための用紙）

⑤普段の授業への取り組み度

このうち、④ではスピーチ課題として、1学期は「自己紹介」および「他己紹介」を課し、2学期当初は夏季課題リーダーの暗唱（自身の文章のつもりで発表）を課した。3学期は1月に冬季課題リーダーの暗唱をし、学期末には、過去形を含めすべての既習文法項目を織り込んだスピーチを課す予定である。

評価ポイントが多岐に渡り、生徒が各自自分でできている点ともっと力を入れたほうがよい点について把握しづらいことから、いかなる学習活動でも机間指導しながら、都度個別に評価する方法の工夫に努めた。時間的にも授業時間を多く割かず個別の学習内容について確認および評価、助言などの段取りを案出し実行することは難しいものだが、生徒の学習状況を把握し、学習行動を迅速に改善させるにはよい方法を実践できたと思う。一定の型で継続したことで、生徒自身もいつ、何を評価されるのかを事前に察することができるようになり、毎回の授業や課題への取り組みが主体的になったとうかがえる。

3.2 中学2年生（68期） 担当：山田忠弘

3.2.1 はじめに

今年度の中2（週4時間）は、教科書を主に扱う2時間とALTとのteam teachingの1時間を山田が担当し、残りの1時間は、非常勤講師の田中先生によるLLの授業（*Basic Tactics for Listening* (Oxford University Press) を使用）となっている。

3.2.2 教科書を用いた授業（2時間）

本校英語科の共通理解「(文法事項などの)先取り学習はしない」に基づき、教科書 *New Crown English Series 2* を1・2学期で終え、3学期は graded readers の読み物 *The Last Sherlock Holmes Story* (Oxford Bookworms Library) を読む予定である（夏休みの宿題として同レベルの *Skyjack!* (Oxford Bookworms Library) を既に読んでいる）。

従って、教科書の8レッスンを1・2学期で半分ずつ進めることになり、1回の授業で扱う教科書本文は原則1ページと決して多くない。しかし、教科書で扱う文法は基本中の基本事項しか挙げられていないため、自作のハンドアウトを用いて毎回補足することで50

分の授業に足る長さとしている。

オーソドックスな授業の流れは以下の通りである。

1. 教科書 new words (CDに続いて音読)
2. 教科書本文 chorus reading (CDを聞き、山田が1文ずつ読むのに続けて repeat)
3. 単語・文法など補足説明
(ここでハンドアウト(4~6に使う)配布)
4. 教科書にない補足事項の説明(例文の説明)
5. 和文英訳演習(例文に即したもの)
6. 追加問題

6は別のテキストなどからの10分程度で終わるような reading や listening 問題(必ずしもその日の文法事項に即したものではない)の改作や、洋楽の聞き取りなどを入れている。

また、単語や基本構文の定着を図るために、原則週1回小テスト(単語と和文英訳)を行っている。

3.2.3 TT授業（1時間）

この形式の授業で心がけているのは、「クラス41名全員がALT(またはクラス)に対して毎回発話する」ということである。時間にすると1人1分にも満たないが、教室にALTがいる意義として重要なことと言える。2学期までに行ったことは主に次の2つである。

1. 直近に学習した文法事項(例えば受動態や比較)に関するペアワーク(テキスト *SIDE by SIDE* から抜粋のハンドアウトを使用)

2. 1人1分スピーチ(テーマはその都度指定)+ALT(または山田)からの質問に答える

2については数日~1週間前に用紙を渡して原稿を作っておくよう指示した。各学期末には同じ形式でスピーチテストとして評点に参入した。原稿の事前添削は出来なかったが、英語の間違いは多く見られたので、writingの指導も兼ねて今後何らかのフォローを行っていききたい。

3学期については、「意見の発表とそれに対する反論」が簡単な形で出来ればと考えている。

3.2.4 LL教室での授業 担当：田中真美

Basic Tactics for Listening (Oxford University Press) を使用し、既成の設問に答える形式での大意理解、語彙の増強、ディクテーションによる確認を行っている。この教材では日常生活においては頻用されるが非英語圏の初級学習者には馴染みのない語彙やイディオムが多用されるため、自然な会話表現に馴染むには適しているが、中学2年生にはやや難解である。完

了形、助動詞 *would* の多用、受動態、比較表現など未修内容も多い。あえて文法に触れず、思い切っている部分は聞き取りのタスクから切り捨てる判断も必要ながら、一定の情報を捉える聞き方を指導する試行錯誤が続いている。音声データやスクリプトを随時配布して定着は自主的な復習に委ねている。

中学1年生のリスニングと同様、人為的に学習事項に焦点を当てた教科書のトレーニングと並行し、「英語がわかる」楽しさを経験させる投げ込み教材を何種か用いた。例えばTV番組の話題で好きな俳優や歌手を褒める会話を *Basic Tactics for Listening* で扱った後、*Britain's Got Talent* で Susan Boyle や Jonathan and Charlotte の有名なパフォーマンスと、それを絶賛する審査員たちのコメントを見せ、*absolutely wonderful, incredible* などの語が感情を込めて繰り返されるのを確認させた。また、*Peppa Pig* よりやや年長向けの幼児向け英語アニメシリーズ *Ben & Holly's Little Kingdom* も用いている。

“B&H is smart, funny and fresh. It doesn't preach to kids, doesn't talk down to them, and is pitched at an almost perfect point not just for grownups and children, but different ages of children as well. It's the best TV show for small kids aged 2-5, hands down.”

(<http://thebests.kotaku.com/the-5-best-tv-shows-for-little-kids-1686163735>)

3.3 中学3年生(67期) 担当：秋元佐恵

3.3.1 はじめに

6年間を見通した本校の英語教育において、「充実期」1年目である中学3年は、高校への重要な橋渡しの時期である。基礎期中2までに比べ、読解量が圧倒的に増え、語彙・文法の新項目も多い。ここで英語に自信を失うことなく、好奇心をもって学び続けてほしい。そのために年度の最初に掲げた指導目標は以下の3つである。

- ① Acquisition of complex noun phrases
- ② Frequent exposure to longer passages
- ③ Improvement of presentation skills

①は今年度の文法項目の中心に置いたものである。後置修飾や関係詞節の作り方を無理なく学べるよう、範囲を広げつつ体系的に扱うようにした。②ではリスニングやリーディングのインプット量を、教科書から段階的に増やすことを目標にした。③では中学のまとめとして、2年間行ってきたスピーチや暗誦を、より

洗練された形で発表できるよう、指導することとした。

この3つの目標は、筆者が毎回の授業で意識している <input → intake → output> の流れと一致する。文法・語法の新項目をインプットし、その項目を含むオーセンティックなリーディング・リスニング教材に大量に触れることで自然に身につけ、最後にスピーチやプレゼンにより、自信をもってアウトプットしてほしい—これが毎回のレッスン、および1年間通しての狙いであり、願いである。

3.3.2 授業の構成と教材

中学は週4時間の英語で、主に教科書を用いた2時間、Oxfordのコースブックを用いたLLが1時間、およびALTとのティーム・ティーチングが1時間である。今年度中3は、全ての授業を筆者が担当した。よってLLの1時間はコースブックを扱うこともあれば、ビデオ教材を用いて教室でのテーマをさらに深めることもできた。

教材は以下の通り。これ以外に毎時間“Challenge English!”という自作プリントを配布している。

【教室授業】

- ・ *New Crown English Series 3* (三省堂)
- ・ 『新中学問題集 発展編』(教育開発出版株式会社)

【LL教材】

- ・ *Basic Tactics for Listening* (Oxford)
- ・ *Developing Tactics for Listening* (Oxford)
- ・ BBC drama “Goal!” (アルク出版)

【夏・冬休み中の副教材】

- ・ *Martin Luther King Jr.* (Pearson Longman)
- ・ *Three Fairy Tales from Oscar Wilde* (Emile)

3.3.3 授業指導例

この節では、文法導入からプレゼンまでを具体的にどのように行ったか、学期ごとに1つずつ示す。

3.3.3.1 Lesson 3 落語(1学期)

New Crown 3 の Lesson 3 *Rakugo Goes Overseas* は250語程度で、落語の小嘶紹介、海外で活躍する落語家へのインタビューから成っている。

●1時間目： Ask 16 different friends

このレッスンの文法項目は現在完了形。導入は時々行っている「インタビューゲーム」。“Have you packed for the Tohoku field trip yet?” “Have you ever been abroad?” “How long have you lived in..?” など完了形を含む16の質問を違った友達に聞いて回り、友達

答えと名前ですべてのマスを埋めてゆく、というゲームである。生徒も比較的楽しんでやっている。最後に現在完了の使い方を練習問題も用いて確認した。

●2 時間目：落語導入

まずは落語について知ろう、ということで導入として教科書を読んでから、*NHK Enjoy Simple English Readers: Introducing Japan* より、*Rakugo* を聞かせた。海外の人に落語を説明する会話形式で、500 語程度。英問英答で確認してからトランスクリプト配布、少しわかりにくいところを問いにして読解。その一部を音読した。

●3 時間目：「まんじゅうこわい」

教科書の小断を読んでから、再び *Enjoy Simple English* より「まんじゅうこわい」をみんなで聞く。だいたいの生徒が知っていた。英問英答→トランスクリプト配布→音読練習。

●4～5 時間目：立川志の輔 英語落語紹介

生徒のなかで本物の落語を聞いたことがある人は、学年 123 名中、わずか 3～4 名。そこで、筆者が最も面白いと思った新作落語（日本語）を見せて、落語の面白さを味わってもらった。その後、同じ志の輔さんによる、英語落語のまくら部分を紹介した（『英語落語で世界を笑わす！』立川志の輔・大島君江著、研究社）。音声聞かせる前に、読解問題として、3 つの小断を穴埋め問題にして配布。生徒にオチを考えさせた。

A: Doctor, doctor, every time I drink coffee, my right eye hurts. What's wrong with me?

B: OK, let me see how you drink your coffee here.

Oh, oh. I see. You should get the () out of the coffee cup when you drink it.

3 つのオチすべて正解した生徒もあり、驚いた（上記の答えは spoon）。最後に、志の輔さんを真似て落語風に読む練習をした。

●6 時間目：日英暗誦シート

教科書の最終ページ（海外で落語公演しているきみ江さんインタビュー）を読んでから、これまでのレッスンのなかで学んだ文法・内容ともに重要な文を 10 個選び日英対照でプリント配布。これを次回までに覚えて、新出単語とともに小テスト。この方法は昨年からは実施している。英語に苦手意識のある生徒の知識定着には有効なようだ。

●7 時間目：インタビュー作成

TT の時間を用いて、教科書で読んだインタビューの形式を参考に、ペアでインタビュー原稿を作った。教師は二人で海外の番組のように、座ってそれらしく

インタビューするデモを見せた。生徒たちは政治家や漫画の主人公などにインタビューするプレゼンをし、最も面白いプレゼンを選んで投票した。

落語についてまとめを行う時間がなかったため、その後の 1 学期末テストで「落語とは何かを海外の人に 40 語程度で説明せよ」という問題を出題した。解答例として良かったのは以下のようなもの。

Rakugo is a traditional storytelling in Japan. A rakugoka, a storyteller, performs two or more characters only by himself with the help of just two tools "tenugui" and "sensu". By watching rakugo, you can *tell* [know] Japan's special tradition of laughter.

英語が苦手な生徒でも、小テストで覚えた文例のもとに、何とか説明しようという努力が見られた。

3.3.3.2 Lesson 5 キング牧師（2 学期）

教科書の Lesson 5 *I Have a Dream* は 370 語程度で、キング牧師の紹介や segregation の実態、オバマ大統領までの流れとスピーチの一部を扱っている。主な文法項目は関係代名詞である。

●夏休み中の事前課題：副読本読解レポート

Martin Luther King Jr. (Pearson Longman) を読み、キング牧師の年表作成と感想をレポート提出させた。また、ちょうど 6 月半ばから、キング牧師の人生を初めて映画化した『グローリー～明日への行進～』という素晴らしい映画が上映中だったので、映画館に見に行くよう伝えた。

●1 時間目：The House That Jack Built

TT の時間に関係代名詞 that の口慣らしとして、マザーグースの *The house that Jack Built* を紹介、みんなで暗誦した。これは八宮教諭に教わった方法で、house, malt, rat, cat, dog, cow の順で絵を黒板に並べてゆき、絵を指さしながら詩を暗誦してゆく、というものだ。リズムカルな音声もお借りし、最終的には生徒全員が楽しく暗誦できた。

ただ、この詩は八宮教諭にならって中 2 あたりで導入したほうがよかったかもしれない。中 3 となると単純に音だけ楽しむ時期を過ぎ、意味を深くとらえる傾向が出てきてしまう。それでも、関係詞の口慣らしとしてはこれに代わるものはないと思った。

●2 時間目：関係詞全地図と実際の運用度

関係詞の応用として、非制限用法や関係副詞の導入と演習をした。この段階ではアクティブに使えなくても良いが、知識としては知っておいてほしい。新しい

関係詞導入には、*Smart Choice* (Oxford University Press)などの自然な会話文を用い、音声を聞かせてから練習した。

さらに、各関係詞(which, that, who, whom, what, when, where, how, why, zero)の実際の使用頻度を、会話・小説・ニュース・学术论文の各領域ごとに、コーパスのグラフで示した (*Student Grammar of Spoken and Written English*, Longman)。生徒たちも実際の使用頻度を数値で見るのは興味深いようだった。

●3 時間目：レポート感想紹介

夏休みに読んだキング牧師の副読本をどのように授業に組み込むか。これは生徒のレポートを読んで、多くの生徒が印象深い文を引用しながら感想を書いたので、それを借りることにした。

01. The US government passed a law that accepted segregation in all states.
読み間違いかと思うくらい信じられなかった。

02. The white boy's parents told King to stop playing with their son.
小さい子供と一緒に遊ぶことすら許されないのかと衝撃を受けた。

03. We must meet hate with love.
白人も自分達と変わらないのだから愛そう、という思いが伝わってくる。

このような文を生徒のレポートから 27 個ピックアップし、どの文に共感できるか話し合った。最後にキング牧師の演説の一部を紹介した。

●4 時間目：キング牧師スピーチ

前半で教科書を扱ってから、キング牧師のスピーチ I say to you today, my friend, で始まる 6 文、250 語程度を聞かせ、暗誦することにした。すぐに全部できる生徒もいるが、1 文がやっとという生徒もいる。今回は行事の関係で時間も限られていたので、列対抗でコンテストをすることにした。1 列 6 名、誰がどこを担当してもよいが、音声を真似て演説らしく発表するよう伝えた。

●5 時間目：レシテーション・コンテスト

コンテストでは列ごとに教室の前に出て、1 人ずつ教卓の前で大きな声で暗誦する。特に最後の 1 文は長く、勇壮さが求められる。I have a dream that one day, down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of "interposition" and "nullification"で始まる部分である。これを読みたいと出てきた生徒は、英語やプレゼンに自信のある者たちで、高らかに暗誦していた。

●6 時間目：The Montgomery Bus Boycott 読解

教科書および夏課題で読んだバス・ボイコットを、より詳しく知るために、別の本から抜粋。750 語程度の文を、各段落の最後の 1 文を補うパラグラフ・リーディングで速読させた。

今回使ったのは昨年度中 3 を担当した須田教諭が使った Oxford Bookworm 版の *Martin Luther King* である。全編にわたって貴重な写真が多く、記述も具体的で、良い資料となった。

●7～8 時間目：スピーチ The Person I Respect

今回のプロダクション課題は、関係詞を用いたスピーチ。TT の 2 時間を使って行った。教師によるモデルスピーチの後、生徒に原稿作成を指示した。

・自分の尊敬する人について、どのような人物で、どのようなところが尊敬できるのか説明。具体的なエピソードを入れるとよい。

・スピーチ時間は 2 分程度。

・写真などを使ってもよいが、前を見てアイコンタクトを取りつつ話せるように。

見ている生徒はオーディエンス・シートを記録、最後にベスト・スピーカーを皆で選んで表彰した。

3.3.4 今後の課題

高校への橋渡し、という観点から、3 つの目標を掲げて各単元のレッスンプランを作り、授業を行ってきた。上記 2 つのように自分が興味のある話題であると、文法と内容の有機的なつながりのある単元学習ができるのだが、あまり興味のない話題だと、生徒も自分も機械的な浅い学びでレッスンが終わってしまう。かといって、文法項目と必修語彙を含む教材を自分でゼロから作り出す余裕がなかった。今後の自分自身の課題としては、より良き単元が増やせるように、各文法項目ごとの教材作りを目指したい。

また、昨年の本論文のまとめに「インプット→インテイク→アウトプットの 3 段階を、いかに生徒に興味を持たせる形で授業形式に落とし込むか」が課題、と書いた。特にレッスンプランの最初に、生徒の好奇心を引き出すアウトプットの形式を考えておきたいと思う。スピーチやスキットだけでなく、今後は生徒の好みそうなディベートや演劇も、積極的に勉強して取り入れていこうと思っている。

3.4 高校1年生(66期) コミュニケーション英語Ⅰ 担当：須田智之

3.4.1 はじめに

筆者はこの学年の中学担任団であった為、英語の教科担当としては4年目である。高校から新たに41名の高入生を迎えるに当たって、生徒達にも心機一転、お互いに刺激し合いながら英語学習に取り組んでもらいたいと考えている。

授業の年間目標としては、英語での学びを通して①4技能をバランス良く伸張させる、②語や文法などの知識理解を深める、③第2言語としての英語使用により自信を持てる様になる、の3つを掲げた。また、授業を進める際の基本的な考え方として Content Based Learning、すなわち「英語を通して何かを学びながら英語力自体の伸張も図っていく」という視点に立ち、読んだ内容に関して話し合う、映像資料を見て理解を深める、感想を英文で書く、発表活動に取り組む等、各活動が相互に結びつくように心掛けている。

教科書は *Unicorn English Communication 1* (文英堂) を使用しているが、生徒達に興味関心、題材の面白さを感じてもらえる様に、その扱いには軽重を付け、原典や映像資料も併せて活用する、必要な場合には別の教材を適宜使用するなどの工夫をしている。本校の大先輩である八宮教諭も教科書内外からの題材を豊富に扱い、毎学期①人文学系、②社会学系、③自然科学系の3分野からの題材を扱う様に心掛けていらっしゃるそうである。今年度はそこまで丁寧な分析は出来なかったが、生徒の成長段階に適した刺激的な題材の収集に今後も努めたい。

3.4.2 授業での取り組み

1学期には下記の教材を扱った。授業開きには使用している教科書の題材にどうしても感情移入出来ず、過去に使用したことのある教科書 *Dream-Maker English Series I, New Edition* (三省堂) からの課を幾つか選んで使用した (1, 2, 5)。

1. My Camera Is My Life
2. Cut
3. Dewey the Library Cat (*Unicorn 1, L.2*)
4. Tama, A Super Stationmaster (*Unicorn 1, SR.2*)
5. Two Wet Coins
6. Who Stole The Door?
7. The Value of Science
8. The Man Who Walked between the Towers

(*Unicorn 1, FR.1*)

授業の組み立てとしては、Oral Introduction / Interaction で教材を導入・内容理解を実施し、単語や文法事項の学習、QA による本文理解、音読、まとめや発展的学習というスタイルを目指している。発展的学習の内容としては、原典資料の読解や映像資料の視聴などの形で実施している。また、特に2学期より Oral Introduction 等の際に PowerPoint のスライドを活用し、より視覚的に授業導入を行う工夫を試みた。

1学期に扱った 5. Two Wet Coins は、ノーベル物理学賞受賞者であるリチャード・ファインマン氏に関する題材であったが、6. Who Stole The Door? と 7. The Value of Science は彼の著書の一部を紹介した。特に 7. The Value of Science は文章量が多いという点で難解なエッセイであるが、英語科が掲げるグローバル・サイエンティストの育成という目標にも合致しており、生徒達にも良い刺激となった様子であった。また、8. The Man Who Walked between the Towers は、フィリップ・プティ氏の驚異的なパフォーマンス (ワールド・トレード・センターを綱渡りで渡った!) を描いた絵本が元になっている。Man On Wire という DVD から、絵本をアニメーション化したものを授業の最後に見せたが、彼の偉業を描いた映画 *The Walk* がまもなく公開予定である。

2学期には以下の教材を扱った。

1. The Body
2. A Dive into the Ocean (*Unicorn 1, L.5*)
3. El Sistema: The Miracle of Music
(*Unicorn 1, L.6*)
4. Why Are You Sleepy? (*Unicorn 1, L.7*)

1. The Body は夏休み課題として *The Body* (Pearson English Readers, Level 5) を読ませ、2学期の冒頭には映画『スタンド・バイ・ミー』の鑑賞も行った。小説と映画の結末の差異や、主人公の少年達や彼らの行った冒険に対する共感を持てる点が、この教材の魅力であると思う。それ以外の課はいずれも教科書からの題材であるが、2. A Dive into the Ocean の海洋生物学者シルビア・アール博士と 3. El Sistema: The Miracle of Music のホセ・アントニオ・アブレウ博士の2名は共に TED Prize の受賞者である。TED のプレゼンテーション映像を発展的な学習に使用することも考えたが、実際には 2. A Dive into the Ocean では Netflix で視聴可能なドキュメンタリー映画『ミッション・ブルー』を、また 3. El Sistema: The Miracle

of Music では DVD『魂の教育エル・システム』を見せた。

3 学期には教科書の L.8 の他、日本人の小説の英訳版（題材未定）なども授業で使用してみたい。

3.4.3 その他の取り組み

(1) 英語の歌

年間を通しての活動として、中学生時から継続して音声面強化と warming-up、更には文法事項の導入や理解を目的として英語の歌を紹介し歌わせている。1 学期には OASIS の *Whatever*、AI の *Story*（彼女自身が歌う英語版が『ベイマックス』の主題歌である）、*Skimbleshanks: The Railway Cat*（ミュージカル『キャッツ』より）、2 学期は *Stand by Me*、*Change the World* 等の歌を紹介した。

(2) 映画など

各レッスンに関連した映像資料に関しては前述の通りであるが、それ以外にも映画などをいわゆる「お楽しみ」として、学校行事の直後や期末考査後の特別時間割りに活用する機会がある。今年度は 1 学期には『ベイマックス』を英語字幕で視聴、1 学期末に『ソウル・サーファー』を英語字幕で、2 学期末には『ラッシュ プライドと友情』を日本語字幕で希望者が鑑賞出来る機会を設けた。『ラッシュ/プライドと友情』は実話に基づく 2 人の F1 レーサーのライバル関係を描いた作品であるが、参加者人数からも非常に好評であったと思う。また、冬休みの宿題として映画館へ『スター・ウォーズ フォースの覚醒』などの映画を観に行くことを奨励したが、非常に好評であった。3 学期には原点に戻って『スター・ウォーズ 新たなる希望』を題材にした授業も展開予定である。

3.4.4 授業外での取り組み

(1) English Journal

中学時代より生徒に自由英作文用のノートを一冊持たせ、時折テーマを与えながらある程度まとまった分量の英文を書く指導を継続している。高校でのこれまでのトピックは自己紹介、GW の出来事、校外学習について、夏休み日記、文化祭についてなどである。また扱った題材の感想や要約を課す場合もある。

(2) パフォーマンス・テスト

学期ごとのパフォーマンス・テストとして、英語による発表活動を行っている。1 学期・2 学期共に人物・動物紹介等をテーマに約 1 分半のスピーチを実施させた。

(3) 副教材など

文法学習用の自習用教材として『表現のための実践ロイヤル英文法』（旺文社）を持たせ、辞書的に活用させている。また英英辞典の活用を勧めている。

(4) 多読・多聴

長期休暇の課題として、夏休みには *The Body* (Pearson English Readers, Level 5) を読ませ、冬休みには各自が好きな本を選び読むという課題を課した。

3.5 高校 1 年生（66 期）英語表現 I

担当：多尾奈央子

3.5.1 はじめに

英語表現 I (2 単位) は 1 単位分は LL 教室を使用した授業とし、もう 1 単位分は TT で行っている。

3.5.2 LL 教室を使用した授業

授業では主に朝日出版社の『CNN English Express』（CNNee）の教材から生徒の興味関心に触れるニュースを取り上げて授業教材を自主作成して進めている。各ニュース教材は 100 語程度で時間にして 40 秒ほどのナチュラルスピードであり、これを使用した授業の流れは以下の通り。

- ① 趣旨をつかむ
- ② dictation（重要語句、重要文法項目等）
- ③ 詳細な内容理解
- ④ 実際のニュース放映映像視聴
- ⑤ 関連するニュースの異なる視点での記事読解
- ⑥ 発音の練習
- ⑦ shadowing
- ⑧ 録音（各自無理のない速度で）

読んでは容易に理解できる英文でも、音声でのインプットとなるととたんに難易度が上がるようで、音声面で各自が弱点とする連結・脱落などを把握できるように録音練習に一つの重点を置いた。録音練習では、自身の発話における癖などが把握でき、発表活動などでしっかりと聴衆に理解してもらうために改善が必要な学習ポイントなど自己を振り返ることができたに思う。学級全体で学習することと、個別に学習・把握できる時間を設けることで、授業に対する動機づけを持たせられたと考える。評価は期末考査に加え、授業内の録音音声（理解した内容を自身が伝えるつもりで主に抑揚に留意させた）を提出させて行った。練習次第で提出音声はより良いものになることを実感したのか、数分の練習時間はみなよく集中して取り組んでいた。

音声データやスクリプトは随時配布して復習できる

ようにし、日々継続して発話することの大事さを伝えることに努めている。

3.5.3 ティーム・ティーチング 担当：田中真美

1 学期の初対面の授業では、授業開きの自己紹介に代え、5～6 人のグループで ALT/JT にインタビューし、各グループの視点で教員を紹介するプロジェクトを課した。最初の授業で、「新しい教員を紹介する学校新聞のインタビューというイメージで、ランダムに質問をせず、テーマを絞り、関連した質問を複数準備する」よう指示した。グループの半数は米国人 ALT、残り半数は日本人担当教員を取材することとしたのは時間の都合からである。2 レッスン目にインタビュー、3 レッスン目に発表の流れであったが、話題を変えず相手の話に応じた会話を続けられるか、英語で聞いた内容を英語で再現できるか、に課題が見つかった。

そこで次に 18 コマのイラストを頼りにある実話を説明するという教材を用いて、時制や冠詞、接続表現の指導を行った。英語を話すことはほとんどの生徒にとって困難であるため、まずは萎縮させず話すよう励ますのは大切であるが、それは不正確な英語を奨励することではない。いずれは学術や職業、趣味の分野で正確なコミュニケーションを図りたいと意欲を持つ生徒たちに、そのコミュニケーションを支えるものへの意識付けをするのは指導者の責務の一つだと考える。

用いた教材は *Very Easy True Stories : A Picture-Based First Reader (Addison-Wesley Publishing Company; X-Library - 1st edition (April 1998))* から、海辺に両親と遊びに来ていた少年が一人で海に入り、溺れているところを女性に救われるが、その 10 年後、成長した少年が同じ海で偶然その女性の夫が溺れているのを発見しその命を救うという実話である。

18 コマを 1 コマずつ順に、指名された生徒が描写し、ALT が不適切な部分を直し、場合によっては JT が理由を解説する。次のコマを指名されたものは前のコマとつながるストーリーになるよう描写せねばならず、代名詞の使い方やつなぎことばの使用がその都度問われる。この間生徒は一切何も書き留めない。3 コマ進むと次の指名者は前の 3 コマを記憶から正確に再現する。次にまた 1 コマずつ新しいコマの表現を整えると、その次の生徒は 3 コマ全部、その次の生徒は頭から 6 コマ... と負荷を増しながらゲーム的に進んでいく。

表現の手直しはなるべく生徒の発想を生かす形で行われるので 4 クラスが同じ表現になるとは限らない

が、事前に ALT/JT で要求事項を擦り合わせ、それを踏まえて ALT が臨機応変に自然な表現を提案してくれる。生徒は最初簡単だと思ったようだが過去形を不可として過去進行形に直されたり、不定冠詞／定冠詞／無冠詞の区別を突きつけられたり、男が二人出てきたところで he が働かないのに気づいたり、最後に He was the husband of the woman who had rescued the boy 10 years before. と話のオチをつけるのには関係詞節が要るとか過去完了形でなければ表せない等気づき、彼らの顔は真剣に変わっていった。週 1 時間という時間的制約で繰り返せないが、ALT ならではの貢献を十分に活かして、生徒の学びも多いレッススタイルだと考えている。

1 学期の締めくくりは 5～6 人のグループによるプレゼンテーションを課した。キーワード(school / war / health / music / sport / manners / media など)から一つのテーマを選び、ドラマやパロディ、擬似ニュース番組、討論など好みの形式でプレゼンテーションを行わせた。「伝える」工夫をするようにと評価の基準を丁寧に説明したが、シナリオ作りに重点が置かれ、英語が聞き手に伝わるのがおざなりであった。特に消極的な生徒は与えられたシナリオの棒読みにとどまるケースもあった。

そこで 2 学期は思い切ってシナリオを与え、演じることに集中させようと考えた。来年度ディベートを行うであろう伏線としての意味合いと、男子校なので全員が男性キャストであること、また映画の秀作が音声及び演技のモデルとして使えることから *12 Angry Men* を題材とした。

文化祭他行事や祝日で度々間が空くことから、2 学期全部を費やした。各クラス 6～7 人のグループを 6 つ作り、映画からの 5～6 分程度のシーン 5 つ (12 人の陪審員を 6～7 人で演じられるように英語に対訳をつけたシナリオを用意) について、好みのシーンを選ばせ演じさせた。あらすじ自体は単純なので ALT から口頭で説明してもらい、用意した 5 つのシーンだけを英語字幕で見せた。また、原作シナリオに記載された 12 人の陪審員の人物像をハンドアウトとして配布し、授業で読み合せをした (実際演技の稽古に入った時に動画と共に参考になっているようであった)。

動画と音声とシナリオはコンピュータ室にファイルを置き、生徒が自由にコピーできるようにしておいた。学期後半の授業は稽古に当て、ALT とそれぞれ助言に当たった。細かな発音指導までは手が届かなかったが、それを補うものとして動画と音声の効果は大き

かったと思う。発表では全員がセリフを完全に覚えているだけでなく、セリフの間や抑揚、動きや視線などが見事に噛み合っており、思わず見入ってしまうようなグループの名演も見られた。生徒に評を書かせたが、褒め言葉として「本物の会話のようだった」「会話になっていた」というものが見られたのは大きな成果である。

3 学期は授業数が少ないが、もう一度「会話」という点に戻り、同意や反論、提案などの表現を扱う。



映画のシーンを演じる

3.6 高校2年(65期) Com 英語Ⅱ

担当：八宮 孝夫

3.6.1 はじめに

本校では「コミュニケーション英語Ⅱ」を通常授業3単位とティーム・ティーチング(TT)1単位とにわけ、3単位のほうは教科書中心、TTではスピーキングを中心に授業を進めている。週3時間で高2の内容の英文をこなしていくのはかなり大変だが、高2の場合、LLの使用が可能なので、本稿ではLLを利用した授業実践を前半で述べる。

筆者はこれまでも、授業で扱った教材理解のフィードバックとして、学期末に「パフォーマンス・テスト」と称して、その学期に学んだ教材の1つについて何らかの発表活動を生徒に課してきた。しかし、これでは厳密に言えば、各課の内容フィードバックにはなっていない。そこで、高2の2学期は各課が終わるごとにそれに関する英作文を書かせるようにした。後半はその実践について述べる。

3.6.2 Com 英語Ⅱでこれまでに扱った教材

1、2学期を通じて扱った教材は以下のとおりである。

<1 学期>

1. Reading a Poem
2. Winnie-the-Pooh
3. What Is Uniquely Human?

4. The Tale of Genji

<2 学期>

5. The Merchant of Venice
6. Global Water Issues
7. The Power of Choosing

この中で、*Unicorn English Communication 2* の教材は、1. 3. 6. 7 である。それ以外のものは、夏課題や、自主教材である。

3.6.3 LL を利用しての実践

LL で主に活用できるのは DVD などを見せる場合とインターネット上の you-tube などの映像教材を見せる場合である。

(1) DVD などを見せる場合

Winnie-the-Pooh は1課でReading a Poem という詩を扱う文章を学習した流れで自主教材として使用したものである。一般には、児童文学と考えられているので、高校2年で扱う教材として適切か、と思われるかもしれないが、言葉遊びが巧みで、詩もしばしば登場し、決して侮れない作品である。

基本的には、優れた俳優による朗読 CD があるので、イラストを助けに読んでいけば面白さは十分理解できるが、ディズニー版の DVD (『くまのプーさん』完全保存版 Walt Disney Classics) があるので、それを見せて比較させると面白い。言葉遊びや詩のリズムの面白さが中心の原文とプーのアクションに重点が置かれたディズニー版は生徒の好みによって評価が分かれる。大抵の生徒は、プーがディズニーのキャラクターとと思っているので、児童文学としての原文の存在に驚く。ディズニーに慣れている生徒はディズニー版を推すが、原文の持つ言葉の面白さに段々と惹かれていく者もいる。そのあたりが興味深い。

(2) you-tube などの活用 1: 本文に沿った形で

What Is Uniquely Human? は松沢哲郎という現役の京大教授による英文で、インターネットで検索すると、you-tube などに松沢教授の英語による講演が多数上がっており (例えば Tetsuro Matsuzawa at TEDx@Kyoto 2013)、その中には、教科書本文のあるセクションとほとんど同じものも見られた。このような場合、教科書付属 CD のネイティブ・スピーカーの発音を聴かせるよりも、多少訛りはあっても、本文を書いたその人自身の発音を聴かせるほうが、より教材を身近に感じさせることができる。実際のところ、松沢教授は英語によるプレゼンに非常に堪能であり、常に笑を絶やさず、ところどころジョークを入れるほど

である。発音も悪くなく、とりわけ、強調したいところはちゃんとそのイントネーションになっており、日本人研究者として英語でプレゼンテーションする際の一つの模範と言えるものである。

また、実験などの説明は言葉ではわかりにくいものもある。例えば、本文に以下のような箇所がある：

“Imagine that the numerals from 1 through 9 appear from place to place randomly on a computer screen for a very short time, such as 0.1 s; they disappear as soon as they appear. You will notice the numerals flashing up on the screen, but you will not be able to remember where exactly each of the numerals appeared. But, surprisingly, the chimpanzees can do it.”

この文章だけでは、チンパンジーがどうやって、数字を記憶していることを証明するのかよくわからない（教科書には2枚の写真が載っており、理解の助けにはなっているのだが、動きがないので不十分なのだ）。ところが、you-tubeの動画ではそれが非常にはっきりする。教授の表情、話ぶり（デリバリー）も手に取るようにわかる。

以上、教科書本文とほぼ一致するような動画がインターネット上にある場合の活用法を紹介した。

(3) you-tube などの活用2：概要などを示す場合

1学期の終わりに、国語科との連携で源氏物語を古文の時間に扱ったあと、その該当箇所を英文で読んでみるという試みを行った。原文も解釈が難しいのに、その英文版はどのようになるのだろうという興味は筆者にもあり、生徒にもあるように思われた。使用したのは Arthur Waley 訳 *The Tale of Genji* の冒頭部分である。ただ、この「桐壺」の巻には、肝心の主人公光源氏は登場せず（最後に生まれるシーンがあるが）、結局、「源氏物語」の全体像を知ることなく、本当に一部の解釈に終わる可能性があった。それは、あまりに虚しい、と思っていたところ、インターネット上に NHK の海外向けテレビ番組 BEGIN Japanology: *The Tale of Genji* を発見した。

この番組は Part 1, Part 2 に分かれており、Part 1 は源氏物語の時代背景の説明、Part 2 は映像と人形を使用している「源氏物語」のあらすじ、という構成であった。それぞれ、30分程度の番組で、そのエッセンスを LL で見ながら、理解度チェックのための質問、また穴あきのスクリプトを用意し、最終的には音声だけでなく文字としても確認させた。

もちろん、概要の理解は英語だけでは無理で、古文

の時間に説明されたことを踏まえているわけであるが、英語で日本特有の事物がどう表現されているのか知る良い機会となった（例えば、藤壺中宮=Lady Fujitsubo）。

(4) you-tube などの活用3：バリエーションを与える

夏課題の『新シェイクスピア物語』（成美堂）は、retold ではあるが、英国の児童作家 Roger Lancelyn Green による物語として読むに耐える英文である。そして、その注釈には有名なセリフなどが原文でのっているところも魅力で、筆者は高2の課題として、これまで3回ほど使用してきた。2学期になると、理解の確認も含めてDVDで *The Merchant of Venice* (2004年アメリカ・イタリア・ルクセンブルク・イギリス合作映画) を視聴させた。そして、Shylock の有名な「ユダヤ人差別に対する訴えの独白」(Hath not a Jew eyes? で始まる) と Portia の法廷の場での「慈悲とは何か」を説く、いわゆる“Mercy speech”を授業で扱い、音読練習をし、暗唱し発表することを学期末のパフォーマンス・テストの選択肢の1つとした。

その際、この2つのセリフは演者によって様々なバリエーションがあるので、その例を you-tube などで見せ、確認した。DVD版は Al Pacino が Shylock 役であるが、“Shylock, monologue”などで検索すると歴代の名優の同じ場面が多数出てくる。代表的なものは、かのシェイクスピア俳優 Laurence Olivier、『宇宙戦争』で有名な Orson Wells、ポアロ役で知られた David Suchet などの独白が興味深い。一気に畳み掛けるようなものもあれば、低い声で初めて段々と激高してくるようなものもある。セリフの間や息の「ため」も異なる。Portia のセリフも同様で、こういう有名場面が様々なバリエーションを見て比較できることはありがたい。

(5) you-tube などの活用4：本文からの応用として

Global Water Issues は沖大幹という東大教授による英文である。松本教授と同じように英語による講演がないか検索したところ、TEDxUTokyo の沖教授のプレゼンは日本語によるものであった（聴衆が日本人なのだから当然であるが）。そこで、(2)で示したような手法は使えなかったのであるが、本文で述べられている fresh water は地球の水の何%を占めているか、主にどこに存在するか、とか仮想水 (virtual water) の問題とかを扱っている動画は多数存在した。そこで、内容的にも妥当で、イラストや映像も見やすく、時間的にも集中力が続くようなものという視点で2---つのサイトを選んだ。

1 つは TED-Ed の Fresh water scarcity: An introduction to the problem および Where do we get fresh water? である。どちらも 3 分 30 秒程度であるが、これでもスクリプトにするとそれぞれ A4 版 1 枚分の分量の英文になる。もう 1 つは Virtual Water and Sustainability という you-tube 動画で、University of Massachusetts, Amherst の講師が教育用に作成したもので、こちらは 12 分ある。注釈をつけると A4 版で 3 枚半にもなる。こちらは、まとめて聞かせるのには長すぎるので Part 1~3 と分かれている節目で切りながら、やはり用意した質問に答える形で理解度を確認し、また最後はスクリプトの穴埋めによって文字でも確認をした。

この 2 つのサイトの聞き取りによって、本文で出てきた「不足」の意味の scarcity とか（それまでは shortage くらいしか出てこなかった）、aquifer (水系) など日ごろ耳慣れない単語にも大分親しむようになった。いずれの動画も、いきなり聞かされたら理解はなかなか難しいであろうが、教科書でキーワードとなる単語や問題点の概要を既習していることで、プラスアルファの情報が出てきても、それなりについていくことができ、ある種の達成感を持つことができると思われる。

以上、LL を使用した際の you-tube などの動画サイトの活用について述べてきた。難しいのは、適切な動画を如何に選ぶか、ということである。例えば、Global Water Issues のような場合、どのような立場に立つかによって、主張は随分異なってくる（水不足がどれほど深刻なのか）。また、出てくる数値や情報も、どれほど客観的な事実に基づいているか、判断して選択しなければならない。「水問題」に詳しくなかった筆者は、日本語による数冊の新書版の入門書と 2015 年出版でデータも比較的新しいと思われる *The Last Drop* (Mike Gonzales et al. Pluto Press) によって、自分なりのフレームワークを作った上で、動画サイトも選び活用したことを付け加えておく。

3.6.4 各課終了後の英作文について

教科書を見ると、課の最後に Express yourself などのコーナーがあり、その課についての英作文を書かせるような課題は決して珍しいものではない。しかし、時間的余裕のない場合が多く、必ずしも実践している教師は多くないのではないか。筆者の場合もそうであったが、高 2 も後半に入り、学習した内容について英文を書くことによって初めて、英文が血肉化する、と

いう面があるであろうと思い、実践した次第である。

自主教材もあるため、課題英作文は必ずしも教科書になっているものにこだわらず、書きやすいと思われるものとした。それぞれの課の課題を上げる：

・ The Merchant of Venice

1 Who do you think is the most important character in this play? And why?

2 Which role would you like to play in the *Merchant of Venice*?

→『ヴェニスの商人』はタイトルからすると胸の肉 1 ポンドを切り取られそうになる Antonio が主人公であるが、近年では Shylock の重要さが増している。そのあたりをどう捉えているか、を見る。

・ Global Water Issues

<In some countries, where water is too polluted to drink, people have to buy bottled water, which sometimes costs them more than 20 percent of their income. In Japan, where we still can drink water from tap, bottled water is getting popular now.>

Q Do you usually drink tap water or bottled water?

What do you think about this situation?

What should we do to improve the situation?

→簡単な解決法はない「水不足」問題であるが、ペットボトルの水が日本でも飲まれつつある現状を考えると、この問題を身近なものとして捉えさせるという狙い。

・ The Power of Choosing

Theme: How my life has been affected by fate, chance and choice

→著者である Sheena Iyengar 教授が、自身の人生を「運命」「偶然」「(自らの) 選択」に分けて説明しているのに倣って、自分のある体験を振り返ってみる。

課題も項目別だったり、質問だったり、テーマを与えたりと形式は決まっていないが、基本は教材の内容を自分の問題として考えさせる、ということが目的である。また、単に課題とすると提出率があまりよくないので、必ず時間を設けて書かせ、もし時間が足りない場合は家でやって後日提出という形をとった。

今回の課題英作文実践を通じてわかったことは、例えば、Global Water Issues のような、ちょっと個人が取り組むには大きすぎるような話題であっても、設問を工夫することで英文は書けるし、問題についてそれなりに考える機会が与えられるということである。Tap water, bottled water を飲む比率はほぼ半々であったが、tap water と答えた生徒でも、そのままという生徒は少なく “I drink tap water, cleaning by a

water purifier”とか “I usually drink tap water, which is made into tea” という答えが多かった。筆者も言われてみれば、そのまま飲むよりも麦茶などにして学校に持ってきていることに気づかされた。また、bottled water を飲む生徒の記述の中に “After the East Japan disaster, our family stopped drinking from the tap and started buying a lot of bottled water” というものが複数あった。確かに、ペットボトルの水はただ流行で飲まれているのではなく、やはりきっかけがあることがわかる。また、bottled water を飲む心理として “Compared to some developed countries, where water is too polluted to drink, tap water is even cleaner in Japan. However, my family usually drink bottled water. It is maybe because once we get a habit of drinking bottled water, we became unable to drink tap water.” と述べたものもあった。

やはり、授業をただやりっぱなしでは、こういう内省をする機会はないであろう。英語で書く、という課題をきっかけに内省し、英文を書くことで学習した内容も自分の体の一部になるのだと思う。

3.6.5 学期末のパフォーマンス・テストについて

筆者は、期末考査の成績は全体の8割とし、残りは平常の課題や発表で評価している。パフォーマンス・テストは学期末に行うもので全体評価の1割を占める。これは、中学1年の時からずっと実践してきているものである。

2学期の課題は

①Shylock’s “Hath not a Jew eyes?” または Portia’s “mercy speech” を暗唱して演じる。その後短いコメント。

②About Water Crisis : 課題で考えたような内容で自分の意見を述べる。

③The Power of Choosing : 課題で考えた内容を発表する。

いつもは、期末考査のあとに時間をとってパフォーマンス・テストを行っているが、今回筆者が期末考査後1週間の出張が入っていたため、期末考査直前の2時間で、この発表活動を行った。各課ごとに英作文をさせていた効果かはどうか定かでないが、比較的、発表活動としてもしっかきしたものができた。Shylockの独白では、何度も動画を見て練習した跡が見えるような熱演が見られた(イントネーションなども素晴らしい)。

また、Water Crisis では、水不足の原因の1つとして “Green Revolution” (1950年代に米国で始まった、病気に強く生産力も高い新種の作物の開発、短期的には素晴らしい成功に思われたが、水を多量に使用する面があり、今日の土壌の水不足に多大な影響を与えたと言われる)について、取り上げた生徒もいた。筆者も、本で読みそのことも頭にはあったが授業で取り上げることはしなかったが、生徒の方からそういう問題まで取り上げてくれたのは、嬉しい驚きであった。The Power of Choosing に関しては、一首の人生のターニング・ポイントを語れば良いのであるから、やはり、部活を始めたきっかけとか楽器を習い始めたきっかけなどについて述べた生徒が多かった。

3.6.6 おわりに

本校では高校1年、2年の生徒は国立台中第一高級中学(日本の高校に相当)との研究交流や釜山国際高校との文化交流などで実際に相手校に派遣されて英語によるプレゼンテーションを行う機会がある。もちろんすべての生徒ではないが、今年度のように台中一中から50人の生徒が本校を訪れ、各クラスに7~8名の台中生徒が来ると、すべての生徒が何らかの形で英語によるコミュニケーションを体験することになる。今まで、身内だけで発表し合っていたことが実際に対外的にも役立つことを実感する機会が持てることは英語学習の動機として大きい。5年間続けてきたパフォーマンス・テストをようやく楽しむ余裕が出てきたと言える。3学期は、総まとめとしての発表活動を行いたい。

3.7 高校2年生(65期)コミュニケーション英語Ⅱ TT(1単位分)担当:須田 智之

3.7.1 はじめに

高校2年生の4単位中の1単位で、ALTとのティーム・ティーチング(以下TT)により、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションやディベート等、主にスピーキング力の向上を図るのが筆者の担当する授業である。

授業1時間の構成としては、まずテーマや活動内容の提示や説明を行い、ペア・グループによる活動を経て、最後にクラス全体の前で発表するという形を基本的に取っている。41人というクラスサイズのため、一人ひとりに十分な英語での発話量を確保するのが難しいが、週ごとに発表者を決めてスピーチを実施させる等の工夫をした。また、発表の内容を清書し提出させ

る等、ライティングによって生徒自身に発話を振り返らせる機会も設けた。

3.7.2 1学期の授業

筆者は4年前、65期生が中1の際にLL授業を受け持ったことがあるが、高入生とは面識がほとんど無かった為、1学期最初には英語での自己紹介活動から始め、生徒にはそのまとめをカードに書いて提出してもらった。その後、GWの出来事についてのレポート活動、英語絵本のスキット作成、関西地域研究の直後には京都市のウェブサイト中の英文挨拶を参考に、関西の魅力を誰か(例:お寺の住職やホテルの支配人等)に成り切ってアピールする挨拶文の作成などを行った。学期最後のパフォーマンス・テストでは、その挨拶文のスピーチを評価の対象とした。

3.7.3 2学期の授業

高2のTTでの活動の中心の1つは英語ディベートであるが、筆者自身は学生時代や教師になって以降もその経験が全く無かった為、過去2回ほど担当した際は、まさに付け焼き刃で授業を行わざるを得なかった。その指導方法を模索するため、いわゆる準備型の英語ディベート全国大会を参観しに行ってみたものの、まるで英語「早口」ディベート大会の様で、余り感心しなかったと記憶している。また、帰国子女向けや社会人向けの英語クラスでの即興型ディベート等にも参加してみた。

この様に、授業での英語ディベート実施方法をずっと模索し続けてきた訳であるが、この授業の昨年度の担当者であった秋元先生が即興型英語ディベートの研修会に参加され授業も比較的实施し易かった、と仰っていたので、筆者も参加してみることにした。

夏に大阪で行われたPDA全国高校即興型英語ディベート合宿・大会2015(一般社団法人パーラメンタリーディベート人材育成協会主催)は、高校生向けの英語ディベート大会と教員向けの講習会の2本立てになっており、生徒のラウンドを観戦すると共に英語ディベートを授業で実施している学校の実践例を学ぶことができ、何よりも教員ラウンドで即興型英語ディベートを実際に体験できたことが非常に参考になった。

この大会・合宿で紹介されていたのは、大阪府立大学の中川智皓助教の50分授業で1ラウンド完結可能なフォーマットであった。英語ディベートを行う際の役割やルール、試合の流れなどについては、中川氏の著書である『授業でできる即興型英語ディベート』

を大いに参考にさせて頂いた。改めてここに中川氏へ感謝の意を表す。

授業では、モデルディベート We should allow the usage of cell-phones at high school.の SCRIPT の実演と基本的なルールの説明の後、数週間かけて数回のラウンドを実施した。各ラウンドのモーションは以下の通りである。

● 練習ラウンド×2回。

- 1) A robot dog is better than a real dog.
- 2) Space exploration is a waste of money.

● Performance Test として×6回

- 1) Lowering the legal voting age brings more benefit than harm.
- 2) Shinkansen passengers should have their baggage checked for security.
- 3) Ambulance services should be charged.
- 4) Homeroom teachers should be criminally charged for bullying.
- 5) Using a selfie stick in public space should be banned.
- 6) Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.

2学期は文化祭直前ともなると、生徒達も疲労困憊の色が濃くなる時期がある。そういった時期に無理をしないようにという訳ではないが、デンゼル・ワシントン主演の映画『グレート・ディベーター 栄光の教室』を見せることにしている。物語は実話に基づいて黒人の大学ディベート・チームの活躍を描いている。人種差別描写に非常にショッキングな場面もあるが、最後のハーバード大学との対戦場面は非常に印象に残り、ことばの力を実感できる映画であると思う。

12月末に開催された第1回PDA高校生即興型英語ディベート全国大会に参加希望生徒を募ったところ、3名が参加することとなった。第1回大会ということで、参加校も少なく優勝が狙えるのではないかと楽観的に考えていたが、惜しくも準決勝と3位決定戦に敗れ第4位入賞という結果に終わった。しかし、参加した生徒達は他校の高校生達との対戦と交流を大いに楽しんでいただいていた様子であった。また、授業導入優秀賞にも選ばれ、1月下旬に行われる世界交流大会への出場権を獲得することができた。



即興型英語ディベート全国大会 表彰式

3.7.4 3学期の授業

3学期は入試などもあり授業の回数が極端に少ない為、授業計画にも工夫が必要である。英語ディベートの他、英語俳句等の Creative Writing に取り組ませるとともに、Dead Poets Society in *Tsukukoma* と題して自作や自分の好きな詩や文学作品等についてのプレゼンテーションに取り組ませる予定である。

3.8 高校3年生(64期) コミュニケーション英語Ⅲ (3単位) 担当：高橋深美

3.8.1 はじめに

高校3年生のコミュニケーション英語Ⅲは高校2年生のコミュニケーション英語Ⅱの流れを引き継ぐ。この論集の締め切りが毎年12月であるため、昨年度の3学期の取り組みから述べることにする。

3.8.2 コミュニケーション英語Ⅱ 3学期の取り組み

3学期は教科書 (*Unicorn English Communication 2*) の11課 *Just Enough* を扱った。この課の冒頭がいわゆる環境問題を扱う英文によくある書き出しで、生徒は「またこういう話か」と思ったようであるが、筆者の *Azby Brown* が著した同名の原書を活用して内容を深めた。この書物は江戸の町人がいかにエコライフを営んでいたかを詳述したもので、教科書にも一部が掲載されているが、江戸庶民の生活様式が精密なイラストで数多く示されている。授業ではパッセージの読解および意見交換を行った。

また、別の話題として、ヒト遺伝子組み換えの論理について考えてみた。以前使用した、Michael Sandel の

The Case against Perfection (邦訳『完全な人間を目指さなくてよい論理』) および他の文章を参照して、読解と作文の教材を再作成した。ヒトゲノムが解読され、ヒト遺伝子の組み換えが技術的に可能となった現在、旧来の優生学(eugenics)を踏まえた議論を見直すことも必要な視点である。

このほか、学年末にはスピーチ(自由題)を実施した。高校1年生より通算して5回目のスピーチであるので、「話し方・聞かせる工夫」については上達した生徒が多く見られた。

3.8.3 コミュニケーション英語Ⅲにおける取り組み

コミュニケーション英語Ⅲは3単位であるが、2単位分は多様なジャンルの英文を読むことを主軸に授業を展開した。教科書 *Unicorn English Communication 3* (文英堂) は文選集のようになっており、よい教材もあるのだが、授業では1回完結で500~600語の英文を読むこととしたので、別の教材から、例えば以下のようなものを取り上げた。

- ・言語の進化 ・環境保護 ・理性と本能
- ・アイルランドの歴史

なお、高校2年生までの教材は ENGLISH ONLY が可能であるが、高校3年生で扱うものには抽象度が高いものがあり、例えば邦訳すると「経験や学習によって影響されず、理性的な指令に勝る非常に強い要因が考えられる」というような内容を英語だけで説明した場合、非常に手間がかかり、本文の流れを見失ってしまう恐れがある。そのため、英語で説明できるところは英語で行い、日本語を使った方が理解が早い部分には日本語を使用して授業を進めた。

また、2学期の一部の時間を使って、条件英作文の練習を行った。日本的な事象から、例えば、パスモ・スイカ、合掌造り、「もったいない」という語などを取り上げ、外国人に説明するという設定で文章を書き、「発信的」な態度につなげられる試みとした。

このほか、3単位中1単位分については、米国における社会生活、学生生活を基本に取り上げているリスニング教材を扱った。この教材はある意味平凡な会話練習だけではなく、犯罪に巻き込まれていくストーリーが織り込まれ、生徒の興味を引いたようであった。

3.9 高校3年生(64期) 英語表現Ⅱ (2単位)

担当：山田 忠弘・田中 真美

3.9.1 はじめに

英語表現Ⅱは週2時間を山田と非常勤講師の田中先

生で 1 時間ずつ担当し、田中先生は主に和文英訳を、山田の方はエッセイライティングを扱った。

3.9.2 エッセイライティング

エッセイライティングパートでは、20～80 語程度の自由英作文練習を行った。授業では自作プリントを用いて 2 問程度の演習を行い、その日の課題（例 1）として 40 語程度の英文を書いて提出させ、翌週に添削して返却している。また別に月に 1 回、70～80 語の問題（例 2）を課して、こちらも添削をしている。いずれの課題でも「日本語できちんと骨子を作る」「できるだけ平易な語彙・構文」「動詞の形を意識する」といった当たり前のことを繰り返し指摘し、意識させるようにしている。

（例 1）下の漫画（左→右）のストーリーを 30 語以内の英語で書きなさい。



図 1 ストーリーを英語で説明する

（例 2）Write within 100 words in English in answer to the following question:

“If you were a high school English teacher, how would you help your students improve their English?”

3.9.3 和文英訳

授業では自作プリントを用いて行った。各レッスンが 1) 文法上複雑な構造を持つために生徒がミスをしやすいつボを克服、2) 日本語が長くて難しそうな原文から主張の骨格を見つける、3) 日本語の形に釣られず何を言わんとしているのかを英語に置き換える、の 3 点の処方箋になるよう心がけた。

終盤はパラグラフパターン（グラフの説明、比較対照、原因結果）の解説と合わせて「和意英訳」に取り組んだ。グラフの読み取りをまずその場で生徒に自由に日本語で出させ、その材料をどのように構成するかのルールを説明し、70 語程度で各自書かせる。日本の少子化の原因をブレインストーミングのスタイルで自由に述べさせ、マッピングしながら整理し、それを元に 80 語程度で各自書かせる。これらは生徒が書こう

とする内容に独自性が出ない英作文であり、いわば縛りのゆるい和文英訳であるとの考えからである。それを経て初めて一文単位では見えてこなかった、正しく伝わる英語を書く上での問題点が見えてくる。

4 総合学習での取り組み

4.1 概要

本校では総合学習の一環として、中学 3 年次に「テーマ学習」、高校 2 年次に「ゼミナール」という時間が設定されている。これら 2 つの総合学習の時間では、土曜日を活用して正課の授業では扱わないような専門的な内容を取り上げて、より高度に深めていく学習を行っている。各教科が一つないし二つの講座を立てて大テーマを提案し、生徒はそれぞれの興味関心に応じて取り組みたいものを選択して受講するシステムで、一つの講座で学ぶ生徒の人数は概ね 10～20 名程度である。

英語科は、第 3 期目に入った本校 SSH の重点目標のひとつ「グローバル・サイエンティストの育成を目指す」を意識して、日本学術振興会（JSPS）が提供する『サイエンス・ダイアログ』というプログラムを主に活用しながら、「国際社会において、受容・発信する能力の育成」に努めている。

このプログラムの詳細については JSPS の HP (<http://www.jps.go.jp/j-sdialogue/>) を参照されたい。

4.2 中学 3 年生（67 期）テーマ学習

講座名は「Science Dialogue」である。

本講座の目標は(1) 海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語で講演していただき、彼らと積極的にコミュニケーションを図る、(2) 同時にプレゼン技術についても学ぶ、(3) (1)と(2)を踏まえて自分が研究したことを英語で発表する、の 3 つである。

生徒にとって毎回の講演テーマは内容が高度に専門的で、英語での理解はもとより日本語でも易しいとは言えないが、事前に講師である研究者の方々と綿密な打ち合わせを重ね、受講生徒が英語での講義を理解できるよう学習資料に基づき基礎情報の予習を促した。講義当日も研究者の工夫（専門的な実験を簡易なものに変えて実演する、研究対象の実物を見せる等）によって、大体的内容は理解できたとアンケート結果から判明した。

今年度の講義内容は次の通りである。

表 1. Science Dialogue 年間計画

Date	Speaker	Topic
①June 6	—	全体オリエンテーション *各教科からの説明を聞き、自分の参加したい講座を選ぶ
②June 20	Dr. Young (United States)	生物学 (生物科学)
③Sept. 12	Dr. Robles (Nicaragua)	実験動物学 (イモリ網膜再生)
④Sept. 26	Dr. Rogers (United Kingdom)	生体分子科学 (ペプチドの翻訳合成技術)
⑤Oct. 17	Dr. Beroya-Eitner (Philippines)	工学 (社会・安全システム科学)
⑥Jan. 16	Dr. Jouen (France)	人間情報学 (教授ロボットの設計手法)
⑦Feb. 7	受講生徒自身の プレゼン	各自の興味に応じた内容

4.3 高校2年生 (64期) ゼミナール

高2ゼミナールでは、「Science Dialog + α」と銘打ち、中3と同じく『サイエンス・ダイアログ』およびイングリッシュ・ルーム講師を活用しつつ、聴衆にきちんと伝わるプレゼン方法の習得を目指すことを目標とした。以下が今年度ゼミナールの概要である。

表 2. Science Dialog & DIY 年間計画

Date	Speaker	Topic
①May 9	—	全体オリエンテーション
②May 30	—	講座オリエンテーション
③June 13	Dr. Perche (France)	工学 (人間医工学)
④June. 27	Dr. Lajko (Hungary)	物理学 (新奇量子相)
⑤Sep. 19	Dr. Benomar (France)	天文学 (赤色巨星の星震学)
⑥Oct. 3	Dr. Mceown (Canada)	医歯薬学 (睡眠)
⑦Nov. 14	Dr. Sriswasdi (Thailand)	生物学 (ゲノム科学)
⑧Jan. 9	受講生徒自身の プレゼン	各自の興味に応じた内容
⑨Jan. 23	受講生徒自身の プレゼン	各自の興味に応じた内容

5 国際交流を支援する取り組み

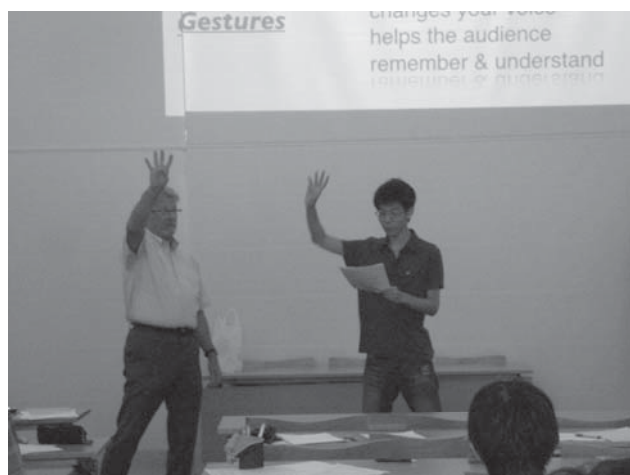
5.1 プレゼンテーション・スキル・ワークショップ

昨年度に引き続き、サイエンス・コミュニケーション・スペシャリストとして活躍中の Vierheller 夫妻を招き、英語での効果的なプレゼンテーション・スキルを学ぶワークショップを1学期期末後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には中3から高2まで約40名の生徒が参加し、グループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキル、具体的にはスピーチの声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについてであった。異なる学年から成る各グループはまず協力して原稿を作り、発表をしながらその都度 Vierheller 夫妻に指導して頂いた。なお、3学期には昨年同様、中1・2を対象とした「ビギナーズ用ワークショップ」も開催予定である。



Gary 先生からアドバイスをもらう



英語でプレゼンでのジェスチャーを
アドバイスしていただく生徒

5.2 台湾国立台中第一高級中学との研究交流

(2015年12月8日～13日)

5.2.1 事前指導

台中一中との研究交流は7年目を迎え、英語科としても事前指導のノウハウが年々蓄積されてきた。定番の Gary & Sachiyo Vierheller 夫妻によるプレゼン指導に加え、2年前よりイングリッシュ・ルームの先生方に原稿を作るところから指導を受けることができるようになり、大きな成果をあげている。

5.2.2 事前指導の内容

11月後半より派遣生徒の一部が、イングリッシュ・ルーム講師の先生方に発表原稿のチェックを受け始めた。専任教員にはなかなか時間的余裕がないため、外部講師の協力を得られることは大変ありがたい。

渡航直前の12月6日(土)には Vierheller 夫妻によるプレゼン全般にかかわる指導を3時間受け、声の出し方・目線の使い方・体の使い方・聴衆とのインタラクションの取り方・スライドの作り方など、多岐にわたって詳細なアドバイスをいただいた。2日後の7日(月)には、各自が土曜日の指導を受けて修正してきたものをイングリッシュ・ルーム講師4名に見ていただき、さらなるブラッシュアップを図った。

Vierheller 夫妻とイングリッシュ・ルーム講師との間でアドバイスの内容が食い違う場合もあったが、各自が自分の事情にあわせて適宜取舍選択するように、という助言も行った。また、他人のプレゼンを聴いた後は積極的に質問をするように、ということも折に触れ指導している。



イングリッシュ・ルーム講師に助言をもらう

5.2.3 本番の様子

今回の研究交流では校長先生も参加し、発表前夜に

もPPTの1枚1枚を検討してくださった。高1生徒も発表後の質疑応答を盛り上げてくれ、プレゼンの仕方も年を追うごとに洗練されてきていることが見てとれた。生徒は発表前日の夜もホテルの会議室を借りてプレゼン予行を行っており、そこでは生徒同士で真剣にアドバイスをしあう姿を見ることができた。

ただ、台中一中の発表では原稿を見ながら行った生徒は皆無だったが、本校の場合はまだ原稿に頼っていたグループもあった。その点ではまだまだ課題があり、今後の彼らの切磋琢磨と成長がいつそう楽しみである。



水俣病に関する発表

5.3 韓国・釜山国際高校との交流

筑波大学の「附属学校のグローバル化に資する事業」における「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」予算により、2013年1月に釜山国際高校より本校に初の訪問団が訪れ、また2013年3月に本校から先方を訪問し、相互交流が実現した。

2015年1月27日に先方生徒19名、引率教員2名が来校した。釜山国際高校の生徒は本校の授業に参加し、昼食を共にしたりして、交流の機会を持った。



2015年3月24日～28日に、本校生徒11名、引率教員3名で韓国・釜山を訪問した。期間中は釜山国際高校と韓国科学アカデミー（理系に特化した高校）への訪問、また釜山・慶州での見学・フィールドワークを実施した。



5.4 イングリッシュ・ルーム

筑波大学より「放課後などに利用して生きた英語のコミュニケーションを生徒にさせる機会を増やす」という目的で財政的支援を得て、「イングリッシュ・ルーム」というプロジェクトが一昨年前から始まり、今年度は3年目である。

本校では、近隣に東京大学の留学生ロッジがあり、そこに住んでいる大学院留学生に協力を依頼して、このプロジェクトを行っている。英語科スタッフ自ら面接を行い、7名の留学生を採用したのである。出身もパキスタン、インド、ルクセンブルク、フランス、マラウイ、ナイジェリア、米国と全世界にわたっており、専門も土木、IT、薬学、統計学、環境問題、原子力、コミュニケーション論、と様々である。今年度は、卒業した5名の留学生に変わって6名の新たなメンバーが加わった。フランス、豪州、ホンジュラス、シンガポール、インド、それに海外での生活が長い日本国籍の方である。

通常は毎週火曜日 3:30～4:30、希望者を対象に、small talk やゲームをしている。また、高2のゼミや中3のテーマ学習の「サイエンス・ダイアログ Jr.」では発表活動の指導もしてもらい、台中一中や釜山国際高校との交流での発表の際も、事前に原稿のチェックやプレゼン練習等で指導をいただいている。今年は、前もって交流に行く生徒たちにアナウンスをしておいたので、原稿チェックなども昨年度よりスムーズであった。

また、海外交流をしてきた生徒たちが、イングリッシュ・ルームで帰国報告をすることで、イングリッシュ・ルームに参加している中学生にフィードバックをする、あるいは講師からの質問などに答えることにより、帰国報告した生徒たちがまた鍛えられる、というシステムが出来つつある。

放課後は、生徒たちも意外と部活動などで忙しく、また活用する生徒も限られているので、それをいかに多くの生徒に還元し、魅力的なプログラムにしていかかを考えていきたい。



講師たちとゲームを楽しむ

5.5 TOMODACHI 東芝アカデミー (TTA)

一昨年まで東芝地球未来会議 (Toshiba Youth Conference) として4カ国の高校生が集い、環境問題について討論したのであるが、昨年からは日米2カ国の高校生参加となり、「科学技術を通じて将来世界に起こりうる複雑な課題を解決していけるように」設定されたプログラムである。

日米それぞれ8名の生徒が参加し、日米混合の4つのチームに分かれて、大きく分けて2つの課題に挑戦をした。

1つは「タワーチャレンジ」：ストロー100本を用いて、なるべく高くても見た目も美しく、横からの風力に強く、地面の揺れに強いタワーを作る、というものである。物理学的な知識が要求され、ストローをどのように組み合わせたら崩れにくい構造の建物ができるかを競う。

もう1つは、「スマート・コミュニティ」：世界の任意の街や都市を選び、そこで自然災害などが起こったとき、どのような形で復興させスマート・コミュニティを作り上げるか、のプレゼンテーション。

いずれも、単に英語が出来るだけでなく、価格や数

学の知識が要求され、非常にチャレンジングなプログラムであった。



チーム内で議論する

6. おわりに

以上概観したように、本校での国際交流の活発化とともに英語科が担う部分が拡大してきた。生徒のプレゼンテーション能力の向上に向けてさらに工夫をこらしていかなければならない。英語科には「国際交流＝英語科」ではなく、全校として取り組む課題という認識があるが、現実には英語科がかかわる部分が依然として大きい。今後、他教科の先生方をいかに巻き込み、全校的な関わり方を築いていくかが課題である。

【参考文献】

<教科書・副教材類>

中学1年生

New Crown English Series 1 三省堂

『Active Phonics』 mpi

Let's Go to the Rainforest Oxford University Press

Wheels Oxford University Press

『5-STAGE 英文法完成 BOOK1』数研出版

All New Very Easy True Stories Pearson Japan

Listen First Oxford University Press

NHK ラジオ『基礎英語1 4月号～』NHK 出版

Michael Swan & Catherine Walter (2003) *The Good Grammar Book* Oxford University Press

Murphy, Raymond (2012)

『マーフィーのケンブリッジ英文法(初級編)新訂版』

Cambridge University Press

その他、文中で記した動画サイトなど

中学2年生

New Crown English Series 2 三省堂

The Last Sherlock Holmes Story

Oxford University Press

Skyjack! Oxford University Press

SIDE by SIDE (third edition) Book2-4

Pearson Longman

Basic Tactics for Listening

Oxford University Press

その他、文中で記した動画サイトなど

中学3年生

New Crown English Series 3 三省堂

Basic Tactics for Listening

Oxford University Press

Developing Tactics for Listening

Oxford University Press

Martin Luther King Jr. Pearson Longman

Martin Luther King Oxford University Press

Three Fairy Tales from Oscar Wilde

Emile Publishing

Smart Choice 2, 3 Oxford University Press

『新中学問題集 発展編』教育開発出版株式会社

『海外ドラマ英会話 BBC Goal!』アルク

立川志の輔・大島君江(2008)『英語落語で世界を笑わす!』研究社

高校 1 年生

Unicorn English Communication 1 文英堂

Dream-Maker English Series I, New Edition 三省堂

Feynman, Richard P. (1985) *“Surely You’re Joking, Mr. Feynman!” Adventures of a Curious Character*

W. W. Norton & Company

Feynman, Richard P. (1988) *“What Do You Care What Other People Think?” Further Adventures of a Curious Character* W. W. Norton & Company

The Body Pearson Longman

綿貫陽他 (2011) 『表現のための実践ロイヤル英文法』
旺文社

その他、文中で記した DVD・動画サイトなど

『CNN ニュース・リスニング 2015[秋冬]』

朝日出版社

『CNN ニュース・リスニング 2015[春夏]』

朝日出版社

『Catch a Wave』 浜島書店

Oxford Advanced Learner’s Dictionary (8th)

Oxford University Press

Longman Dictionary of English Language and Culture, 3rd Revised ピアソン・エデュケーション

綿貫陽他 (2000) 『ロイヤル英文法』 旺文社

高校 2 年生

Gonzales, M. et al. (2015) *The Last Drop*

Pluto Press

Green R. L. (1983) 『新シェイクスピア物語』 成美堂

Milne, A. A. (1926) *Winnie-the-Pooh* Methuen

Waley, A. (2010) *The Tale of Genji* (Abridged) Tuttle

その他、文中で記した動画サイトなど

中川智皓 『授業のできる即興型英語ディベート』

高校 3 年生

Brown, Azby (2013) *Just Enough* Tuttle

Sandel, Michael J. (2007) *The Case against Perfection* Belknap Harvard

Time Is Running Out 朝日出版社

植田一三・上田敏子 (2014) 『英語で説明する日本の文化』 語研

江口裕之・エル・ドゥーマス (2012) 『新・英語で語る日本事情』 The Japan Times

『究極の英語リスニング Vol.1』 アルク

『究極の英語リスニング Vol.2』 アルク

『究極の英語リーディング Vol.1』 アルク